「唱歌適用実験遊戯」（芦田恵之助編）について

野地潤家

一

「恵雨自伝」（昭和25年11月25日、開顕社刊）によると、芦田恵之助先生は、福知山惇明小学校時代、京都市教育会主催の遊戯講習会を受講されたいきさつを、つぎのように述べていられる。

「明治三十年であったと思います。京都は第四回内国勧業博覧会を明年にひかえて、平安神宮の建立、博覧会場の建築等で、中々のさわぎのようでした。京都府教育会も、その会期中に展覧会を開くとか、懸賞論文を募集するとか、すべてに活気を帯びていました。この時、京都市教育会の事業として、横地捨次郎先生を聘し、週に三回、一ケ月に亘る遊戯の講習会を開くことが新聞に出ていました。私は京都を去って既に三年、京都の空気にも親しみたいし、一つのわざでも、身につけたいという希望から、この会に出席することを中島校長に話してみました。すると『では郡教育会から派遣する事にしよう』といって、費用も潤沢にくれました。

さて会場に出てみると、京都市内の先生が主で、郡部からそれ専門に来ているものは、私一人でした。私は郡教育会に報告しなければならぬ責任上、一つの動作をも見落すまいと、腑に落ちないところは、横地先生に教えをこい、唱歌のわからないところは、大橋いくという待賢校の先生にきゝました。一回に四五種ずつ進みましたが、それは悉くその日帰ってからと、その翌一日を全部かけて、詳しく筆記してしまいました。終講の日は、府の学務課から中山書記官がお出でになりました。横地先生は、突然信号体操を私と稲田君にお命じになりました。『芦田君発信、稲田君受信、来賓の方から、文句をいたゞいてやってみなさい』といわれました。私は信号旗を手にして、講堂の一隅に立ちました。稲田君は私に対して、対角の一隅に立ちました。中山書記官が名刺のうらに記された文句は、『ユウギコウシウカイノシユウリヨウヲシユクス』というのでした。私は早速発信の合図をすると、稲田君は受信の合図をしました。私はその文句の一字々々を、迅速に送りました。送ってしまうと、稲田君が高くその文句を読みあげました。来賓も会員も、拍手して喜んでくれました。こうした遊戯は男性的ですが、唱歌適用の舞踊ものになると、私のやるのは見ていられなかったろうと思います。それは三浦ヒロさんの率いられる礫川会の女先生方に、このことを話すと、皆腹をかゝえてお笑いになります。当時はなおさらぶざまなものだったでしょう。この時の筆記は、横地先生の校閲を経て、京都の村上書店から『唱歌適用実験遊戯』と題して刊行しました。可な

りに行われたものですが、私にこの著のあることを知っている人も稀です。今は珍本の部です。」（「恵雨自伝」、一二六～一二七ページ、傍線は引用者。）

右の述懐には、聴講・受講の筆記について、人一倍こまめであった芦田恵之助先生の面目が躍如としている。とりわけ、傍線を施した、「一回に四五種ずつ進みましたが、それは悉くその日帰ってからと、その翌一日を全部かけて、詳しく筆記してしまいました。」と述べてあるのを見ると、芦田先生の筆まめについて、感心させられる。

二

さて、芦田恵之助先生みずから、「今は珍本の部です。」といわれる、「唱歌適用実験遊戯」は、横地捨次郎校閲・芦田恵之助編纂として、明治三二年九月一〇日、京都市の村上書店から刊行された。菊判、本文二〇七ページより成り、ほかに、編者の「自序」四ページが添えられている。

その「自序」は、明治三二年九月、つぎのように記されていた。

「本書は昨年の夏京都府師範学校教諭横地捨次郎君が京都府教育会の依嘱により小学校遊戯法講習会に於て教授せられたるところを余の筆記したるものなれば余の本書に対する関係はたゞ筆記したるとそを編纂したるのみにして其内容の撰択は余の知らざるところなり。されども本書に掲げたる百四十余種の遊戯法は悉く実習したるものにして之を筆記するにも其技を復習しつゝなしたるものなれば単に講師の講話を筆記したるが如きものならざることを信ず。たゞ余の不文にして表出の円満ならざるは実に慙愧に堪へざるなり。他日再版の時をまちて刪修するところあるべし。

本書は単に遊戯の方法を説きたるものにしてそを教授する手段及各遊戯の心身に及ぼす効果等は少しも之を論究せず。これ別に故あるにあらずして一ケ年間の余の実験及研究はいまだ発表するに足らざるを知ればなり。されども現今我国に行はるゝ遊戯書中に此種の記載の脱漏せるは余の深く遺憾とするところにして教育上遊戯の重要視せられざるは蓋しこれ等に基因するならむ。余は目下職を高等師範学校附属小学校に奉じ此等の実験と研究とをなさむには頗る好地位にあり。他日本書を訂正増補して完備せる遊戯書とし以て余の遺憾とするところをなからしめむことを期す。」（同上書、「自序」、一～四ページ、傍線部は引用者。原文には、句読点なし。便宜、引用者によって、句点を施した。）

「唱歌適用実験遊戯」成立の由来と性格とが述べられ、さらに訂正増補などへの見通しが語られている。この「自序」において、編者としての自己の立場と役割とが明らかに示され、その抱負の一斑も述べられているのである。

さて、「唱歌適用実験遊戯」は、二章一三八節から成っている。

第一章

第一節　進め～（幼稚園唱歌集）

学べ～

第二節　友どち来れ（幼稚園唱歌集）

第三節　数へ歌（幼稚園唱歌集）

第四節　門（幼稚園唱歌集）

第五節　兵士来る唱歌（忠実武勇軍歌集）

第六節　指揮行進

第七節　盲の御客（一）
第八節　場所奪ひ（一）
第九節　鷹遊
第十節　富士の裾野（忠実武勇軍歌集）
第十一節　ますぐに立てよ（幼稚園唱歌集）
第十二節　球渡
第十三節　場所奪
第十四節　盲ざし
第十五節　客まねき遊
第十六節　川瀬の千鳥（幼稚園唱歌集）
第十七節　盲鬼（一）
第十八節　盲鬼（二）
第十九節　盲鬼（三）
第二十節　盲鬼（四）
第二十一節　盲鬼（五）
第二十二節　盲鬼（六）
第二十三節　てふ〳〵（幼稚園唱歌集）
第二十四節　名称行進
第二十五節　猫と鼠
第二十六節　元寇（忠実武勇軍歌集）
第二十七節　日の御旗（帝国読本唱歌）
第二十八節　うづまく水（幼稚園唱歌集中の環）
第二十九節　十字形車輪行進
第三十節　車輪行進（一）
第三十一節　車輪行進（二）
第三十二節　球（一）（幼稚園唱歌集）
第三十三節　球（二）
第三十四節　昼夜遊
第三十五節　いでや兵士（忠実武勇軍歌集）
第三十六節　拍手行進法（廻れこまの唱歌）
第三十七節　海陸名称遊
第三十八節　車（幼稚園唱歌集中の子供〳〵）
第三十九節　盲の御給仕
第四十節　手のひきあひ
第四十一節　親の看病
第四十二節　盲の買物
第四十三節　雷（一）
第四十四節　雷（二）
第四十五節　鈴ふり鬼
第四十六節　地獄鬼
第四十七節　狐と雞
第四十八節　子捕鬼
第四十九節　盲の郵便配達
第五十節　いでや皇国（忠実武勇軍歌集）
第五十一節　日本男児（帝国読本軍歌）
第五十二節　蛙
第五十三節　団子
第五十四節　ますら武夫
第五十五節　雀（幼稚園唱歌集）
第五十六節　盲目行進

第五十七節　源平遊
第五十八節　門くゞり競走
第五十九節　倍星駈足
第六十節　整客法
第六十一節　場所取鬼
第六十二節　織方駈足
第六十三節　雞
第六十四節　家鳩
第六十五節　二人組鬼
第六十六節　演説進行法
第六十七節　挨拶進行法
第六十八節　無言挨拶進行法
第六十九節　転回進行
第七十節　行進法（一）
第七十一節　行進法（ポロネイズ）（二）
第七十二節　行進法（三）
第七十三節　花輪進行法
第七十四節　擬馬進行
第七十五節　対舞
第七十六節　花輪進行と蓮花
第七十七節　軍艦
第七十八節　三千余万
第七十九節　朝日に匂ふ（忠実武勇軍歌集）
第八十節　我海軍
第八十一節　愉快
第八十二節　体操遊戯（一）
第八十三節　体操遊戯（二）
第八十四節　唖鈴遊戯（一）
第八十五節　唖鈴遊戯（二）
第八十六節　信号体操

第二章

第一節　盲の御客（一）
第二節　御給仕競走
第三節　一回倒れ競争
第四節　あともどり競争
第五節　人員旗取
第六節　五寸歩み競走
第七節　旗拾ひ
第八節　芋拾ひ
第九節　旗戻し
第十節　背面競争
第十一節　車輪旗取
第十二節　走廻旗取
第十三節　戯驟競争
第十四節　盲目戯驟競争
第十五節　鯉の滝登
第十六節　盲目旗取
第十七節　盲目競走（障害物を置きて指揮するもの）
第十八節　背衝旗取
第十九節　荷運競走

第二十節　球奪
第二十一節　二人二脚競走
第二十二節　二人三脚競走
第二十三節　跳越帽取競走
第二十四節　短冊結び
第二十五節　揮毫競走
第二十六節　花送り
第二十七節　はねつき
第二十八節　かへ〳〵手鞠
第二十九節　球つき
第三十節　柿拾ひ
第三十一節　盲の鐘撞
第三十二節　盲の撃剣
第三十三節　荷担競走
第三十四節　南瓜割
第三十五節　着服競走
第三十六節　二人三手匍匐競走
第三十七節　提燈競走
第三十八節　蛙跳
第三十九節　計算競走
第四十節　二人組競走
第四十一節　脱襲競走
第四十二節　鶏追
第四十三節　嚢脚競走
第四十四節　擬馬旗取
第四十五節　擬馬競走
第四十六節　擬馬分列式
第四十七節　武装競走
第四十八節　フートボール
第四十九節　綱曳
第五十節　障害物競走
第五十一節　幅跳、高跳、棒高跳
第五十二節　城攻

右のように、かなりの数にのぼる遊戯紹介がなされているのである。第一章には、唱歌適用のものが多く収められ、第二章には、唱歌なしの各種遊戯が収められている。

なお、本書には、一七三〜一七六ページ（第一章第八十六節末から第二章第五節まで）がダブっており、さらに、一七七〜一八〇ページ（第二章第七節から第二章第十一節まで）もダブっている。

三

さて、「唱歌適用実験遊戯」に収められ、紹介された、各種の遊戯法は、それぞれ、その「準備」と「動作」の二項に分けて、説かれている。必要に応じて、絵ならびに図解も添えられている。また、簡略に、「準備及動作」と、二つをまとめて述べている例（たとえば、第二章第十四節、盲目戯襲競走）もある。

いま、芦田恵之助先生の叙述のしかたを見るために、一、二の例を掲げると、つぎのようである。

第一章第二十三節　てふ〳〵（幼稚園唱歌集）

準備　一列横隊に整頓せしめ、次に円列を作らしむ。蝶々を四

羽円外にはなつ。（決して四羽には限らず。時に増減すべし。）蝶々は甲乙二人にて組立つるものとす。即甲の左手を乙の左肩に、乙の右手を甲の右肩にかけて、離れざるやうにし、甲の右手、乙の左手はいづれも肩と水平に伸べて、歩調に合はせ、蝶々の飛ぶが如くに手を動かさしむ。

動作

一　円列は（円の内方にむかひたるまゝ）手を連ねて、唱歌（てふてふ）しつつ、右にまわらしむ。

二　蝶々も、同時に動作をなさしむ。即二羽右にまわれば、二羽は左にまわり、出逢はゞ、かならず礼をなさしむ。

三　一曲終らば、円列も蝶も静止し、蝶は其円列中の一人に手をかく。

四　こゝに於て問答をはじむ。たとへば、蝶「あなたは、何の木でありますか。」円「桜の木であります。」の如し。かく蝶の戯むるゝが如き木の名を答ふれば、蝶は円列に復し、其とまりたる木と其右側と二人出でゝ、蝶とならしむ。されども、円列にあるもの、松樫など答へなば、代ることを得ずして、今一回蝶をつとむべきものとす。（同上書、四二～四三ペ、句読点は、引用者。）

第一章第五十二節

準備　一列横隊に整頓せしめ、次に円列を作らしめ、円の内方にむかはしむ。「用意」の令にて、其地位に於て膝まづかしむ。

動作

一　水清くこかげもすゞし」　膝まづきたるまゝにて、拍手せしむ。

二　こゝちよき」左右の手をもて交互に胸部をなでゝ、心地よきさまを擬せしむ。

三　池のみぎはに」　「池の」と唱ふる時、起立せしめ、「みぎはに」にて、右向をなさしむ。

四　うちむれて遊ぶ蛙の面白くぎやうれつそろへて進み行く」膝を少しく折りて、進行をなさしむ。

五　ぴょん〳〵〳〵」両足を揃へて蛙の飛ぶさまに擬して、三回はゞ飛をなさしむ。（同上書、九四～九五ペ、句読点は引用者。）

右のように、それぞれの「遊戯」について、「準備」・「動作」のしかたを、文語文をもって、克明に説述しているのである。

四

本書に解説・紹介されている百三十余種の遊戯法のうち、話しことば・話しかたの視点から注目をすべきは、左に掲げる三例である。

第一章第六十六節　演説進行法

準備　一列横隊に整頓せしめ、次に円列を作らしむ。停止せしむると同時に、円の内方にむかはしめ、其中心に一人を立たしむ。

動作

一　円列は唱歌しつゝ、右に回り、一歌詞終ると同時に停止せしむ。

二　これと同時に、中心にある一人は、一口演説をなすべし。仮令ば「私の足は、人並よりは少しみじかうありますから、近江の琵琶湖を、到底一またぎにすることはなりますまい。」かくの如くして、円列中に、失笑者なきかを注視すべし。されども、

不論理的のことをいふを許さず。

三　失笑者あらば、中心なるものは、円列にかへり、其者中心に入りて、立たざるべからず。

四　然れども、若し失笑者なければ、絶えず一口演説をつゞけざるべからず。仮令ば、前に引続き、「若し一足にて琵琶湖を跨ぐる人ありとせば、其人の足の長さ・凡幾何あるべきか。」など、人の意表に出づることを述べて、失笑せしめむとつとむべし。

五　一回終らば、円列は唱歌しつゝ、右にまはらしむ。（同上書、一二〇～一二一ペ、句読点は引用者。）

第一章第六十七節　挨拶進行法

準備　一列横隊に整頓せしめ、次に円列を作らしむ。停止せしむると同時に、円の内方にむかはしめ、一人をして其中心に立たしむ。

動作

一　円列は唱歌しつゝ、右にまはり、一歌詞を終ると同時に停止せしむ。

二　円列中より、一人の挨拶者とこれの附添人二人とを出して中心なるものに挨拶せしむ。但し、中心なるものを僧侶とすれば、これに適当の挨拶をなさゞるべからず。其他、医者、商人、教師、軍人、老人、など仮定したる人に相当の言詞、語詞を以てせざるべからず。

三　失笑したるもの代りて中心に立たざるべからず。附添人もまた然り。三人共に失笑したる時は、前に中心にありしものゝ命ずるところによりて、一人のこるものとす。

四　かくて一回終らば、円列は唱歌しつゝ、右にまはらしむ。（同上書、一二一～一二三ペ、句読点は、ママの部を除き、引用者。）

第一章第六十八節　無言挨拶進行法

準備　一列横隊に整頓せしめ、次に円列を作らしむ。停止せしむると同時に、円の内方に向はしめ、一人を其中心にたゝしむ。

動作

一　円列は拍手しつゝ、足踏をなさしむ。

二　中心になる者は、無言にて円列の一人を指さしむ。

三　指されたるものは、中心なる者の前に至りて、正しく敬礼をなすべし。礼終れば、中心なるものは指したる生徒の地位にかへり、指されたる者は代りて中心に立たしむ。

（注意）此遊戯は、激烈なる遊戯をなしたる後、「休め」の代りになさしむるものなれば、児童をして倦ましむべからず。（同上書、一二三～一二五ペ、句読点は、引用者。）

右の三例のうち、「挨拶進行法」・「無言挨拶進行法」の二節には、それぞれ挿絵が見られる。

「一口演説」・「あいさつ」・「無言あいさつ」など、ゲームとして、説かれている。本書は、「単に遊戯の方法を説きたるものにしてそを教授する手段及各遊戯の心身に及ぼす効果等は少しも之を論及」（「自序」、二ペ）していない。それゆえ、これら三例の、話しことばを媒介とした遊戯の効果・価値・意義については、一切言及されていない。しかし、明治三〇年代当初、小学校児童の遊戯

において、こうした「ことばあそび」ともいうべきものが採録されていること自体は、注目に値することである。（話しことば教育の視点からも、それを扱うことができるようには、まだなっていなかったとしても。）

五

本書（野地所蔵のもの）の奥付には、

明治三十二年九月五日印刷
明治三十二年九月十日発行
明治三十二年十二月　日再版印刷
明治三十二年十二月　日再版発行

とあり、ことに、後者の再版用日付は、墨で書き加えられたものである。これは出版書肆村上書店の再版用台本であったかと思われる。「自序」一ページにも、「序文やめ」・「他ノ分トカワル」と朱書されており、本文第一ページの丁数についても、墨で、「丁数ヲ改メル「　」とある。なお、巻末の青色の広告欄四ページ分にも、ページごとに朱の斜線が入れられて、再版のための指示がなされているごとくである。

本書は、当時小学校に用いられた唱歌の歌詞に相当する動作を以て斬新な団体的遊戯法を説いており、特異な教師用書となっている。そういう遊戯書としての価値のほか、芦田恵之助先生の、上京前の筆録の一つとして、芦田先生の文章がどのようであったかをも示している。

六

第一次上京後、芦田恵之助先生は、樋口勘次郎氏に師事するところがあった。明治三十一年末、樋口氏の信州での講習に随行し、それを筆録したいきさつについては、「恵雨自伝」に、つぎのように記されている。

「休職の手続き（引用者注、前任校京都府福知山惇明小学校への）が手間どったことは、私にどれほどの幸福をもたらしたか知れません。一箇月余、樋口先生に直接して、生きた教育をうけました。自分でも多少目が開いたかと感じました。そこでこの冬休みをどうかして、有効に過したいと考えました。ある日このことを樋口先生に語って、『何処かに先生の講習がありませんか』ときいてみると、『信州の上田に、年内に四日明けて三日の講習がある。講師は茨城県師範学校長の山田禎三郎君と私だ。私は活動主義新教授法を説こうと思う』とのことでした。山田先生の教育学は別にきゝたいとも思いませんが、樋口先生の活動主義新教授法こそきかねばならぬと思いました。『先生連れていって下さい』『行きたまえ』と許されました。私の心では、実地はこの一箇月余で大体わかった。これに系統を立てゝうかゞったら、活動主義の教育法が大体わかるものと、大なる期待をかけてお伴をしました。

上田では講壇の横に席を一つもらって、先生の一語をきゝもらすまいと、書きとって行きました。それを日々宿に帰っては整理し、徐々に清書も進めました。しかし年内約八時間の講演は、相当に分量の多いもので、年末の一日、正月の三日間これに没頭しましたが、清書はその半も出来ませんでした。東京に帰って、よう〳〵一月末に仕上げました。『信州では、先生にとんだ御迷惑をかけました。よう〳〵こんなものを書きあげました。御覧下さい』といってさし出すと、先生は大そうお喜び下さいました。後に同文館から出た

『活動主義新教授法』（引用者注、明治32年4月16日、同文館刊）は、この筆記がもとになったものゝようでした。」（同上書、一三八～一三九ページ）

ここには、「唱歌適用実験遊戯」成立の契機となった、筆録体験とほぼ同じものを見いだすことができる。「受講筆録」という方式の中に、芦田恵之助という人の一貫した書く姿勢を認めることができる。筆まめで、「書くこと」による体得・修養を目ざした芦田恵之助先生の面目の一面が、そこには見いだされるのである。

付記　なお、本書「唱歌適用実験遊戯」については、昭和42年12月10日（日）、東京都中野区桃園第二小学校図書室における芦田恵之助第十七回忌国語教壇研修大会において、初めて紹介を試みた。

（昭和43年2月4日稿）

（本学教授）